熏風

～教育委員会だより～

第一号　平成二十九年十月一日(日)
河内長野市教育委員会

「経験が人にもたらすもの」

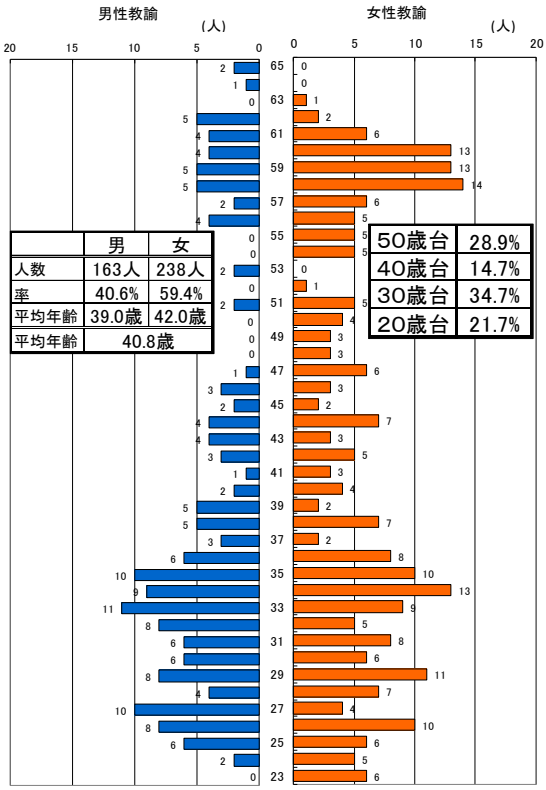
今回から輪番制で担当する「熏風」の先陣を切り、26年間の教職経験と8年間の教育委員会での行政経験を糧に筆を起こしたいと思います。

本市の教員の平均年齢は、ほぼ40歳ですが、平均値と年齢構成は全く異なり、40歳台の教員が最も少ないのが現状です。

私が教員になった35年ほど前には、所属校の平均年齢が30歳を切ったこともありました。

若い教員が多くて活気がありましたが、子どもたちの課題に対してどう取り組めばよいか試行錯誤し、経験の少なさから常に学びの場を求めていたことを記憶しています。

少しのアルバイト経験はあっても、教員という職業しか知らない自分の視野がどれほどのものか、さまざまな人生を歩む子どもたちに適切なアドバイスができるのか、教員としての自分の経験値だけでも早く上げたいと貪欲に仕事をこなしていました。



	男	女
人数	163人	238人
率	40.6%	59.4%
平均年齢	39.0歳	42.0歳
平均年齢	40.8歳	

50歳台	28.9%
40歳台	14.7%
30歳台	34.7%
20歳台	21.7%

3校の中学校で勤務し、それなりの経験を積んで教育委員会の配属となりましたが、教職とは違い、学校に一番関わっている教育行政の仕事ですらほとんど分かっていない別物であることを実感させられ、自分の視野の狭さを痛感することになります。

教育現場にいた時には、市の教育の方向性により予算がつき、それによって教育現場が支えられていることの実感はなく、公教育であることで当然という感覚がありました。

人口が減れば税収も減り、市が出せる予算はそれぞれの市町村によって異なってきます。教育予算のつけ方で現場の状況が大きく変化することや、時には学校さえ無くなってしまうことがあることは、考えてみれば当たり前のことですが、他職や他市でそんな経験をしたことがない者には分かり

づらいものです。また、学校にはあっても教育委員会には配置されない人や機材も多く、現場第一主義で予算をつけられていることも大きな驚きでした。

置かれた環境から刺激を受けることで人は変わり、さまざまな経験を積むことで視野が広がる。私自身も教育行政に関わることでようやく実感したことでした。「異動は最大の研修」と言われる所以でしょう。

しかし、一方で人間は違った環境にも慣れてしまうことができる生物です。

逆さメガネの実験をご存知でしょうか。上下左右が逆転するプリズムの入ったメガネをかけると、頭の動きによって視野が上下左右に激しく揺れ動いて船酔いに似た症状になり、すぐに座り込んで食べたものを吐いてしまうそうです。自分の頭を動かすと視野は全く反対に動くため、自分が動くだろうと認知する逆の方向に 2 倍のスピードで動くように感じます。この異常な感覚は見えている世界と身体の感覚の分離を引き起こしてしまいます。

それでも２週間もすると、見える位置と感じる感覚がいつの間にか一致し、倒立の像が通常の正立の像と同じように感じることができるようになり、逆さメガネをかけたまま自転車に乗ることもできるようになります。

脳での視覚空間の解釈でさえ、短期間の経験によって大きく変更できることが分かっています。また、その力は若者だけでなく年齢を重ねた大人にも同様にあるのです。

安定を求めるたくなるのも人ですが、自分を違った環境に置き、そこでの刺激によって自分の視野を広げ、初めは無理だと感じたことも、順応できると信じて取り組む中で、自らの対応力にさらに自信が持てるようになっていくのです。子どもたちに新たなことに挑戦させることは必要ですが、それは教員にも同じことが言えるでしょう。

今後もますます増えていく若い先生方が変化を恐れることなく、いや自らの変革を求めて挑戦してもらいたいと思います。もちろん歳を重ねたベテランの先生方や私自身にも言えることですが。

今後この「熏風」では、教育畑にとらわれない視点からの文書も多くなることでしょう。それらが読者の視野を広げることを期待して、先陣としての筆を置きたいと思います。

（文責：森本宏司）